

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.243

2013年8月

ヤンゴン大学で「ミャンマー・日本法律研究センター」開所式等を挙



目次

●ニュース	
ヤンゴン大学で「ミャンマー・日本法律研究センター」開所式等を挙	3
行	
第41回経営協議会を開催	4
安否状況入力訓練を実施	4
名古屋大学職場説明会を開催	5
産業技術総合研究所との技術交流会を開催	5
●知の先端	
有機反応で分子を組み立てる	6
忍久保 洋（大学院工学研究科教授）	
●知の未来へ	
成人教育の国際ネットワークと人々の学び	8
—「グローバル」「ローカル」な視点から大人の学びを考える	
河野 明日香（大学院教育発達科学研究科准教授）	
●学生の元気	
第67回名古屋大学・大阪大学対抗競技大会	9
●部局ニュース	
NCC オープニングセレモニーを挙	10
行	
詩人田原氏の講演と朗読セミナーを開催	11
愛知県森林・林業技術センターと「連携に関する協定書」の締結式を挙	11
行	
シンポジウム「日本のエネルギー・環境政策選択」を開催	12
国際シンポジウム「アフリカの半乾燥地に出現する季節湿原の農業利用」等を	12
開催	
研究会集「異文化コミュニケーションレッスン」を開催	13
第6回パワーテクノプロムナードを開催	13
第1回シンポジウム「洋上風力発電とステークホルダーマネージメント」を	14
開催	
減災連携研究センターシンポジウムを開催	14
第91回防災アカデミーを開催	15
博物館で落語会を開催	15
第29回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催	16
大学連携キャンパス講座を開催	16
●名大を表敬訪問された方々	17
●新たに締結した学術交流協定	17
●構成員を対象とした研修	17
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成25年6月16日～7月15日	18
●INFORMATION	
第9回名古屋大学ホームカミングデイ	22
地域と大学で考える「生命の科学」を10月19日（土）に開催	
概要パンフレット「名古屋大学プロフィール2013」を刊行	23
●イベントカレンダー	23
●ちょっと名大史	
学部の誕生と草創期⑧ — 文学部 —	28

ヤンゴン大学で「ミャンマー・日本法律研究センター」開所式等を挙





- 1 センター開所テープカットを前に
 2 総長とティン・トゥンヤンゴン大学長
 (右が総長)
 3 式典での記念撮影

「ミャンマー・日本法律研究センター」開所式及びヤンゴン大学との学术交流協定締結式が、6月29日(土)、ミャンマー ヤンゴン大学において、挙行されました。式典は、ティン・トゥンヤンゴン大学長及び濱口総長のあいさつにはじまり、バ・シュエ ミャンマー教育省副大臣、沼田幹男在ミャンマー日本国特命全権大使、松尾泰樹文部科学省高等教育局学生・留学生課長からのあいさつに続いて、定形法学研究科長から、これまでの本学とヤンゴン大学との交流の経緯が報告されました。そして約200名の参列者が見守る中、両大学の大学間学术交流協定及び大学院法学研究科との部局間学术交流に関する覚書の調印が行われました。その後、同センターの建物に移動し、テープカット及び除幕式を実施しました。

これまで本学はミャンマーに対して、人材育成無償支援(JDS)事業により市場経済化に必要な法整備のための人材を育成し、アジア諸国のナショナル・リーダーを養成するヤング・リーダーズ・プログラム(YLP)によって、医療行政に携わる人材を育成してきました。ミャンマーでは、2008年に新憲法が公布され、2011年3月に民政移管し、急速に民主化及び市場経済化を進



めており、法整備が急務の課題となっています。新設センターは、ミャンマーの教育・研究活動を支援するため、両国の法情報を発信するとともに、法学分野だけでなく広く本学の拠点としての役割を担います。

ヤンゴン大学は、1920年に設立された教育省所管のミャンマーで最も古い国立大学で、国内最高峰の大学ですが、今回の学术交流協定は、両国の総合大学が締結する初めての協定です。5月に安倍総理大臣がミャンマーへ訪問した際にも本学の活動が評価され、高等教育機関からは唯一濱口総長が官民会合に出席し、ティン・セイン大統領に対して法整備支援と人材育成による貢献を約束しました。今回の式典は、両国に大きな注目を浴び、多くの報道陣も集まる中、盛大な式典となりました。

式典の前日に首都ネピドーで表敬訪問したミヤ・エイ教育大臣、ペー・テッ・キン保健大臣からも、同センターの活動に期待が寄せられるとともに、医学を含むより広い分野での更なる交流の拡大を望む旨が伝えられました。中でも、教育省はヤンゴン大学を所管しており、今回のセンター設立に関して、多くの支援を受けました。

式典及び記念パーティに続いて、名古屋大学全学同窓会ミャンマー支部設立式典も行われました。本学はミャンマーに、すでに約80名の修了生を輩出しており、保健省秘書官長、ヤンゴン経済大学学長をはじめとして、同窓生が各界で活躍しています。

今後も本学は、ミャンマーにとどまらず、広くアジアでの学术交流と同地域の人材育成支援を一層進めていきます。

第41回経営協議会を開催

第41回経営協議会が、6月20日(木)、鶴舞地区にある鶴友会館において開催されました。

会議では、濱口総長からあいさつの後、平成24年度実績報告書、平成24事業年度決算、平成26年度概算要求、法科大学院認証評価について、各担当理事及び副総長から説明が行われ、審議の結果、了承されました。



議題について審議を行う各委員

次いで、平成24年度学部卒業生・大学院修了者等の進路状況、平成25年度学部・大学院入学試験状況、大学院の収容定員の充足率、外部資金の受入状況等、研究大学強化促進事業、トランスフォーマティブ生命分子研究所の創設、国立大学改革強化推進補助金事業に関する構想及び体制、AC21国際スクーリングの開催、名古屋大学基金の状況、人材力強化のための教育改革プラン等について報告が行われました。

外部委員の方々からは、平成24事業年度決算に関連する本学の財務関係及び法科大学院の認証評価について、貴重な意見が寄せられました。

安否状況入力訓練を実施

安否状況入力訓練が、7月1日(月)、全ての構成員を対象に実施されました。本学では例年、前期の防災訓練として、自然災害や緊急事態に備えた学内情報伝達の訓練を実施しており、今回は、館内一斉放送設備を用いた緊急放送と、名古屋大学ポータルシステムを用いた安否状況入力訓練を行いました。



安否状況入力訓練する様子

館内一斉放送設備は、非常時に大学本部から学内全体へ速やかに伝達することを目的として、整備が進んでいます。今回の訓練は、放送設備の周知と聞こえ方の確認を目的として行い、チャイムと日本語と英語のアナウンスを流して、それぞれの場所でどのように聞こえるかを確認しました。

この後、安否状況入力訓練を開始しました。本学では非常時の連絡や状況確認のため、緊急メール送信と安否状況入力システムを整備しています。このシステムは、大災害の発生後に状況を調べ、復旧対応につなげるためのもので、自らポータルにアクセスして入力します。訓練開始直後から1時間当たり1,000名以上の入力がなされ、また事務担当者から入力内容の確認などが行われました。一斉放送の聞こえ方も入力してもらい、放送設備の確認にも活用されました。

非常時の確実な情報伝達や状況確認は大変重要な課題であり、いくつかの方法を整備し、設備の使い方をよく理解しておく必要があります。今回の訓練の結果は、非常時の対応の徹底やシステム・機器の改良につなげることであります。

名古屋大学職場説明会を開催

東海・北陸地区国立大学法人等職員採用試験の合格者を対象とした職場説明会が、6月21日(金)、豊田講堂及び野依記念学术交流館において開催されました。

まず、豊田講堂において濱口総長のあいさつがあった後、大学の概要、事務職員の役割や業務内容、今後の採用面接の日程等について紹介がありました。



業務説明の様子

引き続き、野依記念学术交流館に会場を移し、教務・学生サービス、国際交流、企画・評価、研究協力・社会連携、財務・経理、総務・広報、病院・医療支援、施設管理（電気、機械、建築）の8ブースに分かれ、各所属の担当者による個別業務の内容の紹介が25分ごとの入替制等で行われました。

さらに、先輩の経験を伝えるコーナー、福利厚生、給与等の処遇説明コーナーが設けられ、参加者からの具体的な質問に職員が個別に対応しました。

当日は、雨にもかかわらず、前年を大きく上回る約480名の参加があり、それぞれ真剣に説明を聞き、メモをとる姿が見受けられました。

また、学術情報サービス(図書)、教室系技術(電気、機械、化学)については、実際の職場に場所を移して業務説明が行われました。

産業技術総合研究所との技術交流会を開催

独立行政法人産業技術総合研究所（産総研）との技術交流会が、7月2日(火)、産業技術総合研究所中部センター連携会議場において開催されました。これは、連携・協力協定に基づく活動の一環として行われたものです。

この技術交流会は、平成19年に協定が締結されてから今回で12回目の開催になり、両機関から合わせて37名が参加

しました。

初めに、鳥山素弘産業技術総合研究所中部センター所長から開会のあいさつがあり、産総研の連携機関の中でも、本学との連携活動が非常に活発であり、一番評価が高い旨の紹介がありました。

続いて、今年度の共同調査研究（FS研究）提案テーマの紹介が行われ、長谷川工学研究科副研究科長から閉会のあいさつがあり、盛況の内に閉会しました。

発表は、産総研と本学の研究者と合同で「輸送機器用材料・プロセスおよびその周辺技術研究」というキーワードに関するテーマで、2件行われました。FS研究も、開始から7年目を迎え、内容がより充実した発表会となりました。

懇親会では、鳥山素弘産業技術総合研究所中部センター所長による乾杯の後、参加者間で意見交換が活発に行われました。得意分野の技術・研究を互いに補完しながら、両機関間の共同研究等における連携強化が期待される技術交流会となりました。



あいさつをする長谷川副研究科長

有機反応で分子を組み立てる

忍久保 洋 大学院工学研究科教授

高校化学の有機化学に退屈な暗記科目というイメージをもつ人は多いでしょう。そういう人にとっては「亀の甲」と言われるベンゼンの構造は見るのもいやかもしれません。大学の有機化学でも化合物名や反応名など覚えることがあるので、残念ながら化学を専攻する学生の中にも有機化学嫌いが存在します。しかし、反応を操りあたかもプラモデルを組み立てるかのようにより、部品となる化合物をつなぎ合わせ、様々な化合物を作り出せるのが有機化学の醍醐味です。分子を組み立てた後、構造解析により分子構造が見える瞬間は、作品を完成させた瞬間に似ています。自分たちが生み出した化合物を美しいと感じ、部品となるベンゼン環は愛らしいとさえ感じるようになるのです。

私達のグループでは、 π 電子化合物をターゲットとして分子を組み立てる有機合成を行なっています。 π 電子化合物は多彩な光機能や電子的機能をもっており、次世代を担う新しい材料として期待されています。その用途は、有機ELや有機半

導体、有機太陽電池など多方面に広がっています。 π 電子化合物は、適切な分子設計によりその物性をコントロールすることが可能で、軽量、デバイス作成が容易などの特徴と相まって近年活発に研究されています。同時に、その美しい構造が化合物を組み立てるモチベーションとなっています。

最近完成した分子を1つ紹介しましょう。名前をノルコロールといい五角形の部品（ピロール）をつなぎ合わせることによって組みあげています（図1）[1]。部品の結合の各段階にどのような反応を選択するかが腕の見せ所です。この分子はこれまで不安定であるとされてきました。私達もそのことは知っていたので、最初はこれを合成するつもりではなく、実は別のものを作る計画でした。つまり、ノルコロールは予期せずできてしまったのです。このような予期しない発見があるのも研究の面白いところ。この分子は対称性の高い美しい構造（図2）をもつ一方、予想に反して実は安定な分子であり容易に合成できることが分かってきました。

ベンゼンは6個の π 電子をもつため「芳香族性」をもちます（図3）。「芳香族性」とは平面分子が $(4n+2)$ 個の π 電子をもつときに発現する性質で、分子を安定化する作用があります。一方、ノルコロールの基本骨格となっている[16]アニュレンは16個の π 電子をもつため「反芳香族性」をもちます。「反芳香族性」は「芳香族性」とは反対に分子を不安定にするとされています。反芳香族化合物は不安定で容易に入手できるものがなかったため、社会的に意義ある応用は見つかっていないのが現状です。これはべ

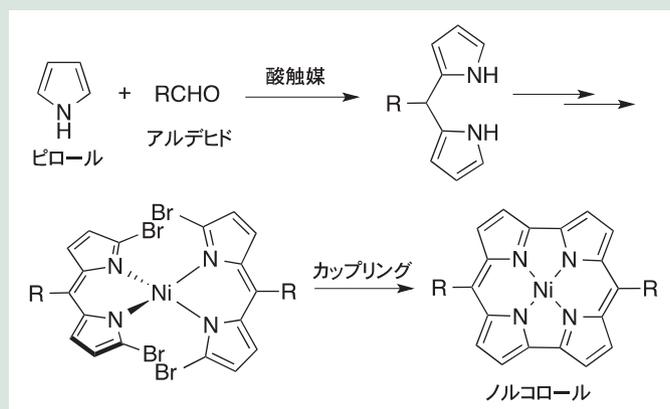


図1 ノルコロールの合成方法（炭素上の水素は省略）

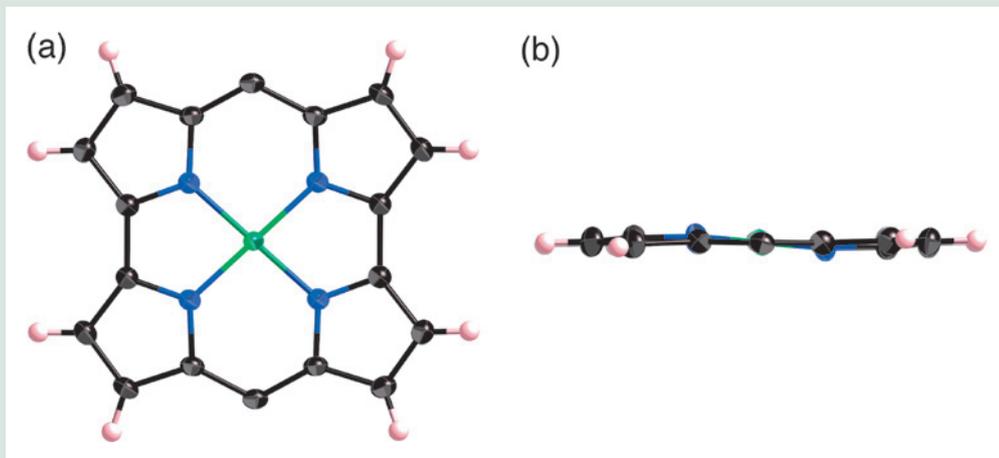


図2 単結晶X線構造解析によって得られたノルコロールの構造。(a)は上から(b)は横から見た図(簡単化のため置換基を省略)。黒は炭素原子、青は窒素原子、ピンクは水素原子、緑はニッケル原子を示す。

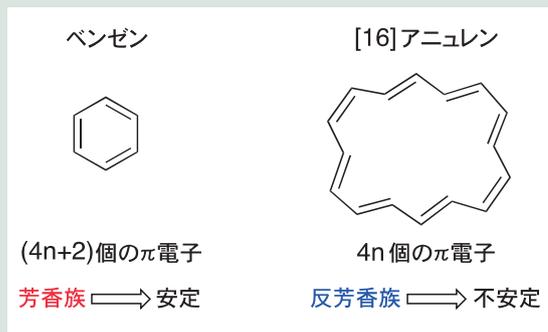


図3 芳香族化合物と反芳香族化合物(炭素上の水素は省略)。1つの二重結合あたり2つのπ電子が存在している。

ベンゼンなどの芳香族性化合物がプラスチック・医薬品など身の回りにあふれているのと対照的です。しかし、反芳香族化合物には電子を出し入れしやすいなど興味深い性質があります。私達が合成したノルコロールは安定で容易に得られるため

「反芳香族性」についてさらに詳しく研究するための素材として適しています。反芳香族化合物の性質をもっと明らかにして、芳香族化合物とは異なる独自の応用に結びつけていきたいと考えています。

私達の研究は、実用性を追求していく研究とは一線を画しています。実用だけを求めるのであれば、簡便に合成できる性質もよく分かった既知物質を用いる方が合理的でしょう。しかし、私達は自分たちオリジナルの新しい分子を組み立てて完成させるという喜びを味わいたいのです。試行錯誤して組み立てた自分の分子にこそ真に新しい性質が潜んでいると信じ、日夜実験室にこもっています。今後も、世界を驚かすような分子を組み立てて行きたいと思います。

[1] T. Ito et al., *Angew. Chem. Int. Ed.* 2012, **51**, 8542.

1969年京都市生まれ。1995年京都大学大学院工学研究科博士後期課程中退、1995年京都大学工学部助手、2003年京都大学大学院理学研究科助教授、2008年より現職。その間、1999～2000年マサチューセッツ工科大学客員研究員、2003～2007年科学技術振興機構さきかけ研究者。モットー：研究室メンバーとともに成長すること。趣味は料理・音楽鑑賞。



河野 明日香

大学院教育発達科学研究科准教授

成人教育の国際ネットワークと人々の学び―「グローバル」「ローカル」な視点から大人の学びを考える

世界における成人教育の議論とネットワーク

成人の識字、政策、ガバナンス、財政、参加・インクルージョン・公正、質、モニタリング。これらは、2009年にブラジルのベレンという町で開催された、第6回ユネスコ国際成人教育会議（CONFINTEA VI）で採択された「ベレン行動枠組み」という今後の世界の成人教育に関する指針で挙げられた諸課題です。成人教育は、成人を対象とする教育を指し、成人が主体的に行う組織的な学習も含まれます。

上記の国際会議のほか、国際成人教育協会（ICAE）やアジア南太平洋成人教育協議会（ASPBAE）等の国際的な成人教育団体が世界における成人教育の議論の場の提供や提言を策定したり、開発途上国の成人教育支援を行い、前出の様々な課題の解決を目指しています。

このように、世界における成人教育のネットワークが拡大する中で、文化的・歴史的共通性を核とした「地域」による域内連携とそれを支える国際ネットワークをどう構築していくのが国際的・政策的に大きな関心事となっています。現在の私の研究は、旧ソ連・中央アジアをフィールドとし、域内連携の現状とそれを取り巻く国際ネットワークの実態を検討することで、域内連携とその基盤となる国際成人教育ネットワークがいかに形成されるかということ和社会教育学や生涯学習の観点から明らかにすることを目的としています。

中央アジア諸国における成人教育

研究の対象である旧ソ連・中央アジアとは、どのような地域でしょうか。私の研究では、かつて

のソビエト連邦を構成していた15の共和国のうち5つ（カザフスタン、ウズベキスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン）を研究の対象としています。90年代初頭に相次いで独立を果たしたこれらの国々では、新たな国づくりのため、現在多岐にわたる教育改革が実施されています。成人教育に対する改革もその例外ではなく、2003年にウズベキスタンで中央アジアの生涯学習に関する初の地域会議が開催されるなど、中央アジア域内の成人教育や生涯学習政策の課題、方針が議論されています。また、ドイツ成人教育支援団体の活動が、中央アジア諸国の成人教育政策や実践に深く関与しており、徐々に成果を挙げていることが現地調査により明らかになってきました。これまであまり注目されてこなかった中央アジアの成人教育ですが、中央アジア諸国の連携や国際機関、国際援助団体等の対中央アジア成人教育支援が顕著である現在において、また、ユネスコ国際成人教育会議への参加国が劇的に増加し、成人教育における国際的紐帯が強く求められる今日、当該地域における成人教育の実態と動向、課題のさらなる検討が迫られています。

このような国際的動向がある一方で、中央アジアに古くから存在する伝統的地域共同体における人々の学びも脈々と受け継がれています。ウズベキスタンなどでは、マハツラと呼ばれる地域共同体での学びが様々な場面で展開されています。今後は、このようなグローバルかつローカルな視点に根ざしながら、中央アジアを事例に、新たな成人教育、生涯学習のあり方を探っていきたいと考えています。



世界各国から集まった人々が成人教育についての議論、提言を行う ICAE 総会（第8回 ICAE 総会にて筆者撮影）

第67回名古屋大学・大阪大学対抗競技大会

第67回名古屋大学・大阪大学対抗競技大会（名阪戦）が、主に5、6月の土・日曜日に、本学を当番校として開催されました。今年度は男子32種目、女子12種目を実施種目とし、本学の運動施設等を会場として、熱戦が繰り広げられました。

今大会の結果は、9月に実施されるソフトボール競技を残して、男子が本学16勝・大阪大学14勝・1分けで本学の勝利、女子が本学7勝・大阪大学5勝で本学の勝利、総合成績では本学23勝・大阪大学19勝・1分けで本学の勝利となりました。本学の総合勝利は、平成19年度以来、6年ぶりで、

体育会を中心として昨年度から行ってきた運動部強化に向けた取り組みが、実を結んだかたちとなりました。

今大会の結果で本学の大会通算成績は、男子が21勝42敗4分け、女子が20勝35敗7分けとなりました（総合成績の制度が導入された第20回から今回までの総合通算成績は、本学の18勝27敗3分けです）。

なお、来年度の名阪戦は、大阪大学が当番校となり開催される予定です。

第67回名古屋大学・大阪大学対抗競技大会対戦結果表

種目	対戦結果		種目	対戦結果		種目	対戦結果	
	名大	阪大		名大	阪大		名大	阪大
アーチェリー	×	○	漕艇	×	○	弓道	○	×
アイスホッケー	×	○	ソフトテニス	×	○	剣道	×	○
アメリカンフットボール	○	×	ソフトボール	9/3, 4		硬式テニス	×	○
空手道	×	○	体操	×	○	漕艇	○	×
弓道	○	×	卓球	×	○	ソフトテニス	×	○
剣道	×	○	バスケットボール	○	×	女子体操	—	
航空	○	×	バドミントン	×	○	卓球	×	○
硬式テニス	○	×	バレーボール	○	×	バスケットボール	○	×
硬式野球	○	×	ハンドボール	引き分け		バドミントン	○	×
ゴルフ	○	×	女子フィギュアスケート	○	×	バレーボール	○	×
サッカー	×	○	ライフル射撃	○	×	フィギュアスケート	×	○
自動車競技	○	×	ラグビー	×	○	ラクロス	○	×
柔道	○	×	ラクロス	○	×	陸上競技	○	×
準硬式野球	○	×	陸上競技	×	○	女子成績	7勝	5勝
少林寺拳法	×	○	相撲	○	×	総合成績	23勝	19勝
水泳	×	○	男子成績	16勝	14勝	(引き分け1)		
スキー	○	×						



アメリカンフットボール



ハンドボール



自動車競技



女子ラクロス

NCC オープニングセレモニーを挙げる

●ナショナルコンポジットセンター

ナショナルコンポジットセンター（NCC）は、6月25日（火）、理学南館大講堂、NCC等において、オープニングセレモニーを挙行しました。学内外から約300名が出席しました。

NCCは、第一に、ものづくり産業が集積する中部地域において、我が国初となる炭素繊維強化熱可塑性樹脂（CFRTP）を使用する自動車構造部材の製造技術開発及び実証研究開発拠点の整備を行うこと、第二に、航空宇宙・風車分野において、落雷時の複合材の挙動を評価する耐雷試験設備の運用を中心に、新規製造技術開発も視野に入れたプロジェクトの実施拠点とすること、第三に、本拠点の整備により、全国の複合材先端研究のハブ拠点となるべく、研究機関ネットワークを形成するとともに、人材育成、国際標準化等を一体的に推進することを目的として設置され、この度、建屋と主要設備の導入が完了しました。

午後1時から理学南館大講堂において挙行された式典では、松下工学研究科長が開会の辞、濱口総長があいさつを行った後、鈴木英夫経済産業省産業技術環境局長、



あいさつをする濱口総長

磯谷桂介文部科学省科学技術・学術政策局科学技術・学術総括官、大村秀章愛知県知事、三田敏雄中部経済連合会会長、奥平総一郎トヨタ自動車株式会社専務役員、廣江陸雄三菱重工業株式会社執行役員、須賀康雄東レ株式会社常任理事からの祝辞がありました。

式典の後、NCCに移動し、来賓代表者及び本学関係者によるテープカットが行われ、続いて、センターの主要設備の見学会を実施しました。

見学会終了後、高橋 淳東京大学工学系研究科教授が「熱可塑性 CFRP の可能性と名大 NCC への期待」と題し、石川ナショナルコンポジットセンター長が「名古屋大学ナショナルコンポジットセンターの概要と研究開発の方向」と題し、それぞれ講演しました。質疑応答では多くの活発な質問がありました。

講演終了後、ES 総合館 ES ホールで祝賀会を催し、松尾副総長があいさつを述べたあと、鈴置副総長の乾杯の発声、山本雅史経済産業省中部経済産業局長、宮田隆司名誉教授の祝辞があり、センターの新たな門出を祝福しました。



来賓代表者と本学関係者のテープカットの様子



施設内見学の様子

詩人田原氏の講演と朗読セミナーを開催

●大学院文学研究科

大学院文学研究科附属「アジアの中の日本文化」研究センターは、7月1日(月)、詩人田原(ティエン・ユアン)氏の講演と朗読セミナーを開催しました。今回は、今年設置された同センターの主催するセミナー・シリーズ「東アジア関係学に向けて」の第2回目になります。第1回目は5月14日(火)に詩人の伊藤比呂美氏を招いて行われまし



講演する田氏

た。この講演は、東アジアの中において日本文化を再考しようという考えを含む一連の企画です。

田氏は中国河南省の出身で、平成22年には詩壇の芥川賞と言われるH氏賞を受賞しており、詩集として『そうして岸が誕生した』、『石の記憶』、研究書に『谷川俊太郎論』があります。中国語と日本語両方で創作と翻訳、研究を行っている気鋭の詩人でもあります。「二つの言語の狭間に」と題した講演では、個人的な経歴から、翻訳論、日中それぞれの言語の特質、詩とは何かなど話題は多岐に及びました。

講演後、詩の朗読が行われ、休憩を挟んで日比嘉高文学研究科准教授を聞き手とするトークセッションが行われました。その後、質疑応答も行われました。会場には、大学院文学研究科の大学院生を中心に、教員、学外からも参加者が集まり、個々の詩の読解から背景となる社会状況の問題まで、活発な意見交換が行われました。

なお、この模様はUstream(動画共有サービス)を通じてライブ中継されました。

愛知県森林・林業技術センターと「連携に関する協定書」の締結式を挙

●大学院生命農学研究科

大学院生命農学研究科は、6月28日(金)、農学部第8講義室において、愛知県森林・林業技術センターとの「連携に関する協定書」の締結式及びこれを記念する講演会が行われました。この協定は、森林科学に関する学術の発展と林業振興のために、大学院生命農学研究科の関連研究分野と愛知県の試験研究機関である森林・林業技術センターが

連携・協力し、双方の研究機能、情報発信力の強化を図ることを目的として締結されたものです。

肘井副研究科長からの説明に続いて、前島生命農学研究科長と佐竹政利森林・林業技術センター所長による協定書への署名と交換及びあいさつがあり、松本光朗森林総合研究所研究コーディネータ・REDD研究開発センター長による記念講演が行われました。

講演では、地球温暖化の防止において森林が果たす役割や、地球環境問題と地域問題の関係、大学・研究機関・行政の連携の重要性について話され、参加者は熱心に聞き入っていました。

今回の協定締結により、共同研究や研究者交流を通じて、森林・林業に関わる最新の技術開発や研究の発展、人材育成が一層促進されることが期待されます。



連携協定書の交換

シンポジウム「日本のエネルギー・環境政策選択」を開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、7月6日(土)、大学院国際開発研究科棟多目的オーディトリウムにおいて、名城大学経済学部との共催で、シンポジウム「日本のエネルギー・環境政策選択」を開催しました。このシンポジウムの趣旨は、再生可能エネルギーの投資をすることで、経済成長と温暖化防止の同時実現が可能であること及びエネルギーに課税



シンポジウムの様子

しても、所得税等を相殺減税することによって経済的利益が見込めることを示すものです。

藤川国際開発研究科長の司会のもと、第1部では、李秀澈名城大学経済学部教授による趣旨の説明があり、李教授、朴勝俊関西学院大学総合政策学部准教授、ウナンダ・チュプレツチャ ケンブリッジ・エコノメトリクス研究員から、分析に用いた経済・環境・環境分析用モデルの解説と分析結果が紹介されました。第2部では、講演を行った3名を加え、再生可能エネルギーの調達価格等算定委員会会長・中央環境審議会廃棄物・リサイクル部会の委員を務める植田和弘京都大学経済学研究科教授、中央環境審議会地球環境部会委員である高村ゆかり環境学研究科教授をパネリストに迎え、グリーングロースの可能性や、いわゆる「モデル」の信頼性についてパネルディスカッションが行われました。最後に、植田教授から今後の研究の方向性を含めたあいさつがあり、閉会しました。閉会後は、北部生協で懇親会が行われ、さらに議論を深めました。

国際シンポジウム「アフリカの半乾燥地に出現する季節湿原の農業利用」等を開催

●大学院国際開発研究科

大学院国際開発研究科は、7月13日(土)、野依記念学術交流館において、国際シンポジウム「アフリカの半乾燥地に出現する季節湿原の農業利用」及び公開講座「砂漠の国でコメづくり？」を開催しました。これは、同研究科と大学院生命農学研究科が参画している地球規模課題対応国際科学技術協力 (SATREPS) 『半乾燥地の水環境保全を目指

した洪水-干ばつ対応農法の提案』の一環として開かれました。SATREPSでは、洪水や早ばつを繰り返す不安定な水環境にある砂漠国ナミビアで、安定した穀物生産が確保できる農法を創り出す研究が行われています。この研究は、現地の水環境や社会の仕組みと調和したものでないと持続可能が出来ないため、作物学、水文学、開発学の3つの分野が連携して研究が行われています。

シンポジウムは、藤川国際開発研究科長のあいさつに続いて、オズムンド・ムワンデメレ ナミビア大学副学長をはじめとする6名のナミビア大学研究者による作物学、水文学、開発学、畜産学、アグロフォレストリーなど多様な研究分野での現状発表が行われ、同研究科が国際協力機構 (JICA) から受託している「ナミビア国参加型普及手法研修」の研修員15名を含む約70名の参加者が討論を行いました。公開講座では、SATREPS 各分野班長である飯嶋盛雄近畿大学教授、檜山哲哉総合地球環境学研究所准教授、西川芳昭龍谷大学教授から、環境と開発の調和を地域農民主体で実現する、社会実装に向けた研究進捗状況の報告が行われ、約50名の参加者との情報・意見交換が行われました。



記念撮影

研究集会「異文化コミュニケーションレッスン」を開催

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科は、6月29日(土)、全学教育棟北棟406会議室において、研究集会「異文化コミュニケーションレッスン」を開催しました。馬、宇宙人やロボットなどの異文化をもつ存在と人との遭遇を考えていくことなどについて、講演がありました。

まず、玉崎紀子中京大学名誉教授が「『戦火の馬』-原作・



講演する山口教授

舞台劇・映画」と題し、主人公及び語り手が馬である小説の原作が1982年に書かれ、舞台劇に書き直されて、最終的に「戦火の馬」という映画になった経緯を説明しました。

次に、山口均愛知学院大学教授が「『E.T.』の中の児童文学」と題した講演で、「E.T. (1982年公開の映画)」における友好型の宇宙人との出会いについて述べました。E.T.が初めて言葉を話すようになる場面でのやり取りが、別れの場面において効果的に反復されるための仕掛けを説明した上で、父親が不在の影に覆われている子どもたちと「異形のもの」とのコミュニケーションの問題点についても述べました。最後に、岡田美智男豊橋技術科学大学工学研究科教授が「〈弱いロボット〉の誕生-弱さが引き出すコミュニケーションについて考える」と題して、非日常的な存在であるロボットと子どもたちとのコミュニケーションのあり方について論じました。子どもという共通点をもとにして他者への理解を築き上げていく過程を、軍用馬、宇宙人や弱いロボットの存在から見ることができました。異文化コミュニケーションのもつ問題点を文学的及び認知科学的な側面から探る意義深いものとなりました。

第6回パワーテクノプロムナードを開催

●エコトピア科学研究所

エコトピア科学研究所は、7月10日(水)、第6回パワーテクノプロムナードを開催しました。これは、電力システムの今後のあるべき姿及びその礎となる電力技術、人材の育成のあるべき方向性について議論していくことを目的としたものです。

将来の環境に調和した高効率な電力システムを実現する



会場の様子

ためには、再生可能エネルギーによる電源の導入を進めるとともに、電力システムの損失を低減していく必要があります。その1つとして、送変電システムに超電導機器を導入することが考えられています。そこで今回は、「超電導ケーブルで変わる次世代電力機器・システム」というテーマでパネルディスカッションを行い、超電導電力機器の中で最も開発が進んでいる超電導ケーブルを、電力機器・システムに導入するシナリオ及び課題を検討しました。

田中エコトピア科学研究所長のあいさつの後、コーディネータである花井正広同研究所寄附研究部門教授の趣旨説明及びパネリストの紹介があり、前半では、超電導ケーブルで何が変わるのかをテーマに、超電導ケーブル導入のメリットが整理されました。後半では、超電導ケーブルを導入する手順について、現在進行しているプロジェクトの位置づけなどが紹介されました。

当初の定員を上回り、満席となった会場からの質疑も多数あり、活発な議論が交わされました。導入に向けたステップが議論されたことで、今後に大きな期待を寄せることができるディスカッションでした。

第1回シンポジウム「洋上風力発電とステークホルダーマネージメント」を開催

●地球水循環研究センター

地球水循環研究センター洋上風力利用マネージメント寄附研究部門は、6月24日(月)、ES総合館ES会議室において、第1回シンポジウム「洋上風力発電とステークホルダーマネージメント」を開催しました。

同センター寄附研究部門は、産学連携による洋上風力発電の事業化を目指し、わが国で初めてステークホルダーマ



シンポジウムの様子

ネージメント学を研究する研究部門として、4月に設置されました。同部門は、当学問領域の社会的な存在意義や具体的な事業との関わりについて、一般の方々や専門家から理解と協力を仰ぐために、年に2回の頻度でシンポジウムを開催する予定です。その1回目となる今回は、学内外合わせて約40名が参加しました。

初めに安田公昭同センター寄附研究部門教授があいさつをし、上田博同センター教授が「洋上風力と気象学のかかりについて」と題し、洋上風況観測システムの実証研究に関する紹介、次いで、本巢芽美同部門助教から「陸上風力発電と受容性」と題し、風力発電の導入問題と地域住民からの受容性に関する調査の紹介があり、安田教授が「洋上風力とステークホルダーマネージメント論」と題して、漁業権の発生や漁村社会の変遷などの解説及び歴史的経緯から現在の漁業権のしくみを説明しました。

質疑では、洋上風力の先進国である欧州と日本の漁業権の相違点や漁業補償の法的根拠など、実際の事業を想定した具体的な質問があり、熱心な討議が行われました。第2回目のシンポジウムは今年12月に開催予定です。

減災連携研究センターシンポジウムを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、7月12日(金)、ES総合館ESホールにおいて、減災連携研究センターシンポジウム～「減災連携研究」の展望～を開催しました。シンポジウムでは、同センターで行った平成24年度の取り組み、研究成果を発表するとともに、今後の研究や活動をより良いものとするためのディスカッションが行われ、約180名が参加



パネルディスカッションの様子

しました。野田減災連携研究センター副センター長の開会あいさつの後、第1部では、福和減災連携研究センター長より、平成24年度の減災連携研究センターの取り組みについて発表がありました。第2部では、武村雅之同センター寄附研究部門教授のコーディネートのもと、専任教員6名が平成24年度の研究活動紹介を行いました。また発表に対する、今後の期待や要望について、会場からの意見を交えて議論が行われました。休憩時間には、現在建設中の「減災館(仮称)」の見学が行われ、今年度末完成に向けての工程と、防災・減災教育と減災研究の連携拠点施設になることの説明がありました。第3部では、隈本邦彦同センター客員教授をコーディネータに、客員教授4名、社会連携推進会議委員2名、兼任教員3名をパネリストに迎えて、ディスカッションが行われました。同センターのこれまでの活動についての感想や、南海トラフ巨大地震に立ち向かうために果たすべき役割・期待について、様々な立場から活発な議論が行われました。最後に、曾根同センター副センター長から閉会のあいさつがありました。

第91回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、6月18日(火)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第91回防災アカデミーを開催しました。今回は、桶田 敦 TBS テレビ放送局解説委員による「防災機関としてのテレビの役割」と題した講演が行われ、95名の参加がありました。

講演では、初めに、リスクコミュニケーションの立場か



講演する桶田氏

ら、テレビが防災機関としてどのような役割を果たすかについて説明され、続いて東日本大震災の実例に基づき、観測情報として津波の第一波の高さをそのまま伝えたことへの様々な議論について紹介されました。

その後、事前の警鐘番組の例として、平成17年に放映されたテレビ映像が紹介され、東日本大震災以前の宮古市田老地区の取り組みや、避難の重要性などを説明した当時の映像をもとに、事前や事後で報道機関として何ができるのかについての説明がありました。

最後に、独自の防災訓練の様子や、緊急時における第一報の流し方について映像で詳しく説明されました。

参加者からは講演内容を踏まえ、テレビ局の安全性やメディアへの要求について活発な質疑応答が行われました。

博物館で落語会を開催

●博物館

博物館では、6月29日(土)、落語会「名大博物館で落語を聴こう！」を開催しました。これは、同館で3月25日(月)から7月20日(土)まで開催されていた第17回特別展「くじら クジラ 鯨」の関連企画として、開催されたものです。同展では、平成21年春に名古屋港に流れついたマッコウクジラの死体から4年間かけて作った全身骨格標本をはじめ



落語会の様子

クジラに関わるさまざまな資料を展示しました。

落語会は、上方落語の桂九雀さんが、特別展の内容にちなんで新作落語「鯨医者」を演じました。「鯨医者」では、往診に出かけようと航海中に鯨に飲み込まれてしまった医者が、持っていた薬(下剤)を鯨の腹の中でパラパラとまきます。鯨は下痢を起こし、そのおかげでめでたく鯨の腹から脱出できるというお話です。

続いて、博物館の教員による「『鯨医者』に出てくるように鯨が人を飲み込むことはほんとうに可能なのか?」についての解説が行われました。これまでに人が丸ごと鯨に飲み込まれたという確実な証拠はないが、食道の大きさなどから見て、マッコウクジラなら可能かもしれないとの説明がありました。最後に、古典落語の「はてなの茶碗」が演じられ、生演奏のお囃子も入りました。

展示室内に高座を設けての落語会は、博物館として初めての試みでしたが、約270名もの来場者があり大歓声がありました。2階展示室、3階展示室に用意した席は満席となり、立ち見も出るほど盛況でした。

第29回トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催

●附属図書館



会場の様子

附属図書館は、7月9日(火)、同館5階多目的室において、第29回友の会トークサロン「ふみよむゆふべ」を開催しました。今回は、加藤靖恵文学研究科准教授による、「『失われた時を求めて』と大聖堂」と題した講演が行われ、学内外から33名の参加がありました。

講演では、マルセル・プルーストの著書『失われた時を求めて』に記述された大聖堂の描写について、著者の愛読書の一つであったエミール・マールの著書『13世紀フランス宗教芸術』等の記述と比較しつつ、それぞれの原文と大聖堂の彫刻写真を使いながら解説されました。

また、フランスの図書館におけるエミール・マール等の草稿閲覧にまつわるエピソードや、プルーストの草稿の電子化による研究の進展についても説明されました。

参加者からは、「フランスの教会や図書館の写真をみることでイメージがしやすかった」、「フランス文学に興味があった」などの感想が寄せられました。

大学連携キャンパス講座を開催

●博物館



講演する澤木氏

博物館では、5月18日(土)、6月1日(土)、15日(土)、22日(土)、29日(土)、同館講義室において、公益財団法人名古屋産業技術研究所(名産研)との共催で、名古屋市生涯学習センター大学連携キャンパス講座「達人と話そうー光(火)を使う、光で観る」を開催しました。

同講座は今年で4年目となり、今回は393名が受講しました。

一般の方を相手に科学の話をするのは、話す方も聴く方も大変に思われますが、講師の先生方の努力と探究心旺盛な参加者によって、充実した企画になりました。

「ちょっと難しすぎた内容もあった。」、「実演もあって面白かった。」、「写真が良かった。」、「光の歴史が良くわかった。」、「光を使っの身近な応用が良くわかった。」などの感想があり、次回につながる積極的な意見も寄せられました。

名大を表敬訪問された方々 [平成25年4月16日～7月15日]

日付	国/地域	訪問者	目的
4月19日	アラブ 首長国連邦	アブダビ教育評議会からムギール・ハミース・アル・ハイリー 局長他2名	表敬あいさつ及びUAEからの留学生受け入れに係る 意見交換
5月8日	中国	同済大学国際文化交流学院孫宜学副院長他2名	表敬あいさつ及び中国語教員・中国語履修生との交流
5月29日	韓国	駐名古屋韓国総領事館から李均東総領事他2名	表敬あいさつ
6月7日	モンゴル	在大阪モンゴル総領事館からチョナイ・克蘭ダ総領事他1名	表敬あいさつ
6月14日	モンゴル	モンゴル科学技術大学からテュデブ・バトバヤール学長代行 他3名	表敬あいさつ
6月27日	中国	上海交通大学から黄震副学長他3名	表敬あいさつ

新たに締結した学術交流協定 [平成25年4月16日～7月15日]

大学間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名
6月25日	国際機関	国際連合（地域開発センター）
6月29日	ミャンマー	ヤンゴン大学

部局間学術交流協定

締結日	地域/国名	大学/研究機関名	部局名
4月6日	台湾	国立中正大学国際交流センター	国際部
5月16日	ドイツ	フラウンホーファー研究機構フラウンホーファー ICT 化学技術研究所	ナショナルコンポジットセンター

構成員を対象とした研修 [平成25年4月16日～7月15日]

実施日	研修名	目的	参加人数
4月2日(火) ～12日(金)	平成25年度新規採用職員研修	本学新規採用職員に対し、法人職員としての心構えを身につけると共に、 社会人として必要な業務遂行上の基礎知識及び能力を養成する。	61名
4月16日(火)	平成25年度先端的低炭素化技術開発 (ALCA) 公募説明会	本学研究者に対し、外部資金獲得を推進するため、先端的低炭素化技術開 発 (ALCA) 事業制度の説明を行い、当該事業への申請を促す。	46名
4月22日(月)	平成26年度採用分 独立行政法人日本学術振興会 特別研究員公募説明会	本学大学院生等に対し、研究者としてのキャリアパス及び環境整備を支援 するため、日本学術振興会特別研究員事業制度の説明を行い、当該事業へ の申請を促す。	220名
4月23日(火)	平成25年度先端計測分析技術・機器 開発プログラム、研究成果最適展開 支援プログラム (A-STEP)、産学協 同実用化開発事業 公募説明会	本学研究者に対し、外部資金獲得を推進するため、先端計測分析技術・機 器開発プログラム、研究成果最適展開支援プログラム (A-STEP)、産学 協同実用化開発の各事業制度の説明を行い、当該事業への申請を促す。	82名
5月20日(月) ～21日(火)	平成25年度東海地区 国立大学法人等職員基礎研修	東海地区国立大学法人等機関での勤務経験が半年以上2年未満の者に対 し、法人職員の心構え等を改めて習得させ、必要な業務遂行上の基礎知識 及び能力を養成する。	109名
5月23日(木)	平成25年度戦略的創造研究推進事業 さきがけ公募説明会	本学研究者に対し、外部資金獲得を推進するため、戦略的創造研究推進事 業制度の説明を行い、当該事業への申請を促す。	30名
5月23日(木)	第1回(東山)廃棄物処理取扱者 講習会(新規)	学内の実験系廃棄物の適切な排出方法を教育し、排出に必要な「廃棄物処 理取扱者認定証」を与える。	135名
5月24日(金)	第2回(鶴舞)廃棄物処理取扱者 講習会(新規)	学内の実験系廃棄物の適切な排出方法を教育し、排出に必要な「廃棄物処 理取扱者認定証」を与える。	28名
5月29日(水)	第1回一般高圧ガス取扱講習会	高圧ガスを取り扱う者に向け、安全かつ適切な取り扱いを教育する。	214名
6月3日(月) ～6日(木)	平成25年度(前期)医療安全・院内 感染対策・医薬品安全使用研修	医療法により病院管理者に定期開催が義務付けられている、同研修を従業者 に対し実施し、業務遂行上の技能やチームの一員としての意識向上を図る。	約2500名

構成員を対象とした研修 [平成25年4月16日～7月15日]

実施日	研修名	目的	参加人数
6月13日(木)	平成25年度名古屋大学主任研修	名古屋大学職員の主任として職場における役割を自覚し、掛長への準備段階として身につけておくべき態度や意識、リーダーシップ発揮に必要な諸能力を養う。	15名
6月17日(月)	第3回(東山)廃棄物処理取扱者講習会(新規)	学内の実験系廃棄物の適切な排出方法を教育し、排出に必要な「廃棄物処理取扱者認定証」を与えるため。	109名
6月18日(火)	平成25年度研究成果展開事業研究成果最適展開支援プログラム(A-STEP)(大型挑戦タイプ)公募説明会	本学研究者に対し、外部資金獲得を推進するため、研究成果展開事業研究成果最適展開支援プログラム(A-STEP)の説明を行い、当該事業への申請を促す。	28名
6月19日(水)	TOEIC対策セミナー	TOEIC公開テスト及び学内にて実施するTOEIC IPテストに向けた学習方法等を学ぶ機会を提供することにより、職員の英会話に対する自己研鑽を促す。	38名
6月20日(木)	平成25年度名古屋大学パートタイム勤務職員等研修	パートタイム勤務職員(契約職員を含む)に対し、大学職員としての心構えを自覚させるとともに、業務遂行上必要な基礎知識、能力、態度等を養成する。	76名
6月24日(月)	第2回一般高圧ガス取扱講習会	高圧ガスを取り扱う者に向け、安全かつ適切な取り扱いを教育するため。	218名
6月27日(木)	第1回TOEIC IPテスト	平成23年度末年齢が35歳以下の事務系及び施設系職員に対してTOEIC IPテストの受験機会を提供し、職員の英会話に対する自己研鑽を促す。	49名
7月8日(月)～9日(火)	平成25年度図書系職員初任者研修	附属図書館に新たに採用された職員、および異動により転入した職員に対し、図書館業務遂行に必要な基礎的な知識と技術を習得させることを目的とする。	27名
7月11日(木)	英会話リスニング教材聞き方講座	英会話リスニング教材研修にて使用する教材の効果的な活用方法を学ぶ機会を提供することにより、研修効果の向上及び職員の意欲等の維持・向上を図る。	27名

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
1 中日春秋：小澤正直情報科学研究科教授は量子測定の公理について「新しい公式を生み出すのは夢。定説を覆すには、勇気が必要です」と語る	5.31(金)	中日(朝刊)
2 法科大学院合同説明会開催：15日 本学がブースを構える	6.16(日)	中日(朝刊)
3 中村英樹工学研究科教授は信号不要の丸い交差点ラウンドアバウトについて「交通事故死亡者数が全国ワーストワンで、南海トラフ巨大地震で大きな被害も想定される愛知県では、特に導入の意義がある」と語る	6.17(月)	読売
4 研究現場発：DLCの超高速プラズマ成膜を極める 上坂裕之工学研究科准教授	6.17(月)	中部経済
5 福和伸夫減災連携研究センター教授は愛知、三重、静岡の市町村などで高潮ハザードマップの作成が進んでいないことについて「住民がどう逃げるかを考える基礎材料として高潮ハザードマップを早急に作成すべきだ」と語る	6.17(月)	中日(朝刊)
6 現代日本誤百科(816)：「見習いシェフ」町田 健文学研究科教授	6.17(月)	中日(朝刊)
7 第24回英国科学実験講座クリスマス・レクチャー2013開催：8月18日 豊田講堂にて行われる	6.17(月)	読売
8 紙つづて：文化を尊ぶ文明 野依良治本学特別教授	6.17(月)	中日(夕刊)
9 日本学士院第103回授賞式開催：17日 日本学士院賞 巽 和行物質科学国際研究センター特任教授	6.17(月)	中日(夕刊)
10 本学の人気の教養科目「囲碁の世界」について島 百々子さん法学部2年生は「相手を観察し、先を読む力が身に付いた」と語り、蟹江道弘さん工学部2年生は「状況を把握する力や相手とのコミュニケーションは就職活動につながるかもしれない」と語る	6.17(月)	日経(夕刊)
11 名大博物館で落語を聴こう！開催：29日 出演 桂 丸雀氏	6.17(月) 6.19(水) 6.26(水)	中日(夕刊) 中日(朝刊) 読売
12 中日文化センター7月新講座：「日本の地下で何が起きているのか 日本列島の地殻大変動を理解する」山岡耕春環境学研究科教授	6.17(月) 6.20(木)	中日(夕刊) 中日(夕刊)
13 医人伝：岩尾聡士経済学研究科寄附講座教授	6.18(火)	中日(朝刊)
14 現代日本誤百科(817)：「発言には懸念している」町田 健文学研究科教授	6.18(火)	中日(朝刊)
15 いまドキッ！大学生：本学が出演する「七大戦」や「名阪戦」が取り上げられる	6.18(火)	中日(朝刊)
16 名古屋城本丸御殿復元の歴史的意義 名古屋城総合事務所学芸員朝日美砂子氏本学博士課程中退	6.18(火)	朝日(朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
17 紙上診察室：ナットクラッカー症候群で血尿 精密検査し原因確かめて 後藤百万医学系研究科教授	6.18 (火)	中日 (朝刊)
18 中京って？第2部⑩：冒険より日常に憧れ 國枝理事が安定志向の名古屋の学生について在学中の海外留学を勧めていると語る	6.19 (水)	読売
19 ミャンマーの脳外科医師2名が本学の先進医療の現場を視察	6.19 (水)	読売
20 現代日本誤百科 (818)：失敗は「百億%」ない 町田 健文学研究科教授	6.19 (水)	中日 (朝刊)
21 林 良嗣環境学研究科教授が委員長を務める国土交通省中部地方整備局の事業評価監視委員会は木曾川上流に建設予定の新丸山ダムについて事業継続が妥当との結論を出した	6.19 (水)	朝日 (朝刊)
22 名古屋大学星の会講演会開催：23日 立原研悟理学研究科准教授が講演	6.19 (水)	中日 (朝刊)
23 濱口総長が東京大学の4学期制移行について「4学期制は、夏季の学生短期留学に現実的な手法」と語る	6.20 (木)	読売
24 濱口総長が国立大学協会の副会長に選出される	6.20 (木)	日経 (朝刊)
25 本学を含む全国11大学でつくる「RU11」が「日本版 NIH」構想に対し、実用化の後押しだけに偏重するのではなく基礎研究の底上げを求め声明を発表	6.20 (木)	日刊工業
26 現代日本誤百科 (819)：「下手な脚本家が換骨奪胎」町田 健文学研究科教授	6.20 (木)	中日 (朝刊)
27 数理ウェブ開催：22日 大沢健夫多元数理科学研究科教授が「岡理論と核関数」と題して講演	6.20 (木)	中日 (朝刊)
28 本学との学術協定についてモンゴル科学技術大学長バトバイヤル・ツデブ氏が語る	6.21 (金)	中日 (朝刊)
29 生命農学研究科は愛知県森林・林業技術センターと学術連携協定を締結する	6.21 (金)	中日 (朝刊)
30 青年法律家協会あいち支部設立55周年記念会合開催：21日 森 英樹本学名誉教授が講演	6.22 (土)	中日 (朝刊)
31 本学や東京大学、東レ株式会社、トヨタ自動車株式会社などが共同で炭素繊維を全面的に使った自動車の開発を開始し、2020年の実用化を目指す	6.22 (土) 6.26 (水)	日経 (夕刊) 読売
32 地球を読む：国立大学改革 世界標準の「知の拠点」に 野依良治本学特別教授	6.23 (日)	読売
33 第95回全国高等学校野球選手権記念愛知大会 1 回戦：7月14日 教育学部附属高等学校は中部大学第一高等学校と対戦	6.23 (日) 6.30 (日)	読売 読売
34 現代日本誤百科 (820)：壮大な「ロマンをあおりたてる」町田 健文学研究科教授	6.24 (月)	中日 (朝刊)
35 未来を拓く大学33：愛知医科大学長石川直久氏本学元助教授	6.24 (月)	読売
36 講演会「発達障害だって大丈夫ー自閉症の子を育てる幸せー」開催：7月18日 椋山女学園大学准教授堀田あけみ氏本学卒業生が講演	6.24 (月)	朝日 (朝刊)
37 紙つぶて：掛け算が質を変える 野依良治本学特別教授	6.24 (月)	中日 (夕刊)
38 相撲部で奮闘する3人の留学生、アレクサンドル・トニッティさん本学学生と文栄俊さん同学生、関庚植さん同学生が取り上げられる	6.24 (月)	中日 (夕刊)
39 本学がアジア各国に日本法の研究センターを開設するなど法整備支援に取り組んでいることについて濱口総長は「専門性の高いグローバル人材を育てる、アジアの『ハブ大学』として名乗りを上げられるようにしたい」と語る	6.25 (火)	朝日 (朝刊)
40 本学と共同でスマートフォン向けの名古屋駅構内のナビゲーションや店舗検索ができるシステムを構築するなど産学連携の取り組み「プロジェクト・TEN」が事業化に向けた活動を開始	6.26 (水)	日刊工業
41 紙つぶて余語：オンリーワンとナンバーワン 野依良治本学特別教授	6.26 (水)	中日 (朝刊)
42 現代日本誤百科 (821)：「他己分析」町田 健文学研究科教授	6.26 (水)	中日 (朝刊)
43 本学内に開設したナショナルコンポジットセンターについて石川隆司工学研究科教授は「将来、車の重さを3分の1にすることも可能だ。燃費が良く、事故の衝撃にも強い車を実現したい」と語る	6.26 (水) 6.28 (金)	中日 (朝刊) 他4社 日刊工業
44 紙つぶて余語：欠乏という豊かさ 野依良治本学特別教授	6.27 (木)	中日 (朝刊)
45 本学や愛知県立大学、トヨタ自動車株式会社などが参加する自動車の安全技術の確立を目的とした産学官連携組織「自動車安全技術プロジェクトチーム」を愛知県が発足	6.27 (木)	中日 (朝刊)
46 特集ワイド：この国はどこへ行こうとしているのか 益川敏英本学特別教授	6.27 (木)	毎日 (夕刊)
47 紙つぶて：人類存続に貢献する日本 野依良治本学特別教授	6.28 (金)	中日 (朝刊)
48 大西卓哉 JAXA 宇宙飛行士講演会開催：2日 第29回宇宙技術および科学の国際シンポジウムの併設事業	6.28 (金)	読売
49 森川高行環境学研究科教授はアイサンテクノロジー株式会社と共同で自動車の走行支援システムの研究開発に取り組む	6.28 (金)	日経 (夕刊)
50 本学発ベンチャー企業ファイン・バイオメディカル有限会社が開発した医療用ロボット「EVE」が取り上げられる	6.28 (金)	日経 (夕刊)
51 be report：地名と災害の悩ましい関係 福和伸夫減災連携研究センター教授、河合真梨子さん本学大学院生などが調査した研究成果が紹介される	6.29 (土)	朝日 (朝刊)
52 自分の道 自分で選ぶ：名古屋大学 法を知る舞台はアジア	6.29 (土)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
53 ミクロの探検隊「名古屋大学のムシを電子顕微鏡で観察しよう！」開催：7月22日、8月24日	6.29 (土)	中日 (朝刊)
54 名古屋大学英文学会サマー・セミナー市民公開講座開催：7月12日	6.29 (土)	中日 (朝刊)
55 ミャンマー・日本法律研究センターをヤンゴン大学キャンパスに開所	6.29 (土) 6.30 (日) 7. 1 (月)	中日 (夕刊) 朝日 (朝刊) 他2社 毎日 (朝刊)
56 紙つづて余語：女性の社会参画 野依良治本学特別教授	6.29 (土)	中日 (朝刊)
57 核心：名大 ミャンマーに拠点新設 法整備で成長後押し	6.30 (日)	中日 (朝刊)
58 内堀外掘：名古屋の街づくりを考える会の委員を務める福和伸夫減災連携研究センター教授が「首都直下地震で東京が大変になったときに備え、名古屋の三の丸が首都機能を代替できるように大改造を」と語る	6.30 (日)	中日 (朝刊)
59 社説：本学を含む全国11大学でつくる「RU11」が間接経費の増加を求める提言を発表したことが取り上げられる	7. 1 (月)	日刊工業
60 第53回中部日本学生拳法選手権大会：日本拳法部 団体 2位	7. 1 (月)	中日 (朝刊)
61 現場発：科学技術立国3 研究独法 成果鈍る 野依良治本学特別教授は「理研も努力の余地がある」と語る	7. 2 (火)	日経 (朝刊)
62 石原一彰工学研究科教授などはα-ヒドロキシカルボン酸アミドの新しい合成手法を確立	7. 2 (火)	化学工業日報
63 ウチの学食：モハマド・サフワンさん本学3年生がイスラム教が禁じる豚肉やアルコールを含まない「ハラールフード」のメニューを紹介	7. 2 (火)	中日 (朝刊)
64 肝炎市民公開講座：6日 医学部附属病院にて行われる	7. 2 (火)	中日 (朝刊)
65 愛知大学中部地方産業研究所創立60周年記念シンポジウム開催：13日 家森信善経済学研究科教授が基調講演	7. 2 (火)	中日 (朝刊)
66 憲法・原発、真摯な議論を 名古屋市立大学名誉教授福吉勝男氏本学博士課程修了	7. 2 (火)	朝日 (朝刊)
67 医人伝：愛知淑徳大学クリニック院長稲福 繁氏本学元講師	7. 2 (火)	中日 (朝刊)
68 谷本昌志理学研究科助教と井上摩耶さん同博士課程などの研究グループは魚の耳石の役割を解明	7. 2 (火)	中日 (夕刊)
69 吉村 崇トランスフォーマティブ生命分子研究所教授は魚が日照時間の変化を感じる季節センサーを発見	7. 3 (水)	毎日 (朝刊) 他4社
70 博物館「みちのく森の絆—東日本震災復興応援 いがりまさし作品展—」開催：12～19日	7. 3 (水)	中日 (朝刊)
71 市民講座：「やさしい表面科学『水』の科学」野依記念学術交流館で行われる	7. 3 (水)	中日 (朝刊)
72 山岡耕春環境学研究科教授は南海トラフのうち東海地震だけ予知を踏まえた防災体制を取っていることに対し「東海地震を特別扱いする科学的根拠がない」と語る	7. 4 (木)	朝日 (朝刊)
73 認定特定非営利活動法人愛知排泄ケア研究会第12回市民公開講座：「次世代につなぐ排泄ケア」	7. 4 (木)	中日 (朝刊)
74 特定非営利活動法人ドットジェイビー東海支部に所属する本学の学生などが愛知選挙区の候補者たちのフェイスブックを確認	7. 4 (木)	中日 (夕刊)
75 森 典華ビジネス人材育成センター特任准教授は「1500社以上の企業を回り、博士を採用する利点を伝えてきた」と同センターの取り組みについて語る	7. 5 (金)	朝日 (朝刊)
76 大学活用法 企業の産学連携戦略41：NTT 本学と日本電信電話株式会社との連携が取り上げられる	7. 5 (金)	日刊工業
77 第35回名大カフェ“Science, and Me「いまどきの霧箱の実験で素粒子などを観測『見えないけれどそこにある?』」開催：10日 中村光廣エコトピア科学研究所教授が講演	7. 5 (金)	中日 (朝刊)
78 朝日カルチャーセンター新講座：「磁場が織りなす宇宙と未来」草野完也太陽地球環境研究所教授	7. 6 (土)	朝日 (朝刊)
79 松永克志工学研究科教授と中村篤智同准教授などのグループは電気を通すファイアの開発に成功	7. 7 (日)	中日 (朝刊)
80 病院の実力：婦人科内視鏡治療 医学部附属病院の実績が取り上げられる	7. 7 (日)	読売
81 世界口腔保健学術大会記念第19回口腔保健シンポジウム「口からはじまる健康長寿—口とカラダから考える健康管理—」開催：6日 内藤真理子医学系研究科准教授が講演	7. 7 (日)	読売
82 小島勢二医学系研究科教授と村松秀城医学部附属病院助教などのグループは若年性骨髄単球性白血病の原因となる血液がんの骨髄異形成症候群を白血病に進行させる遺伝子異常を突き止めた	7. 8 (月) 7. 9 (火)	中日 (朝刊) 他2社 日経 (朝刊)
83 第27回ユニバーシアード競技大会：鈴木亜由子さん経済学部4年生 陸上女子1万メートル 1位	7. 8 (月) 7. 9 (火)	中日 (夕刊) 朝日 (朝刊)
84 五島剛太理学研究科教授は自然科学研究機構基礎生物学研究所が植物の細胞板とそれを包む隔膜形成体の様子の連続写真の撮影に成功したことについて「微小管の繊維の詳細な様子を光学顕微鏡で見ることができるようになったことはすごい」と語る	7. 9 (火)	読売
85 医人伝：三浦清邦医学系研究科寄附講座教授	7. 9 (火)	中日 (朝刊)
86 連続憲法講座2013：「い・ま・こ・そ憲法再び憲法の危機！」本 秀紀法学研究科教授	7. 9 (火)	中日 (朝刊)
87 大学の实力調査 西日本編①：「大学の实力」調査回答状況で本学の調査結果が取り上げられる	7. 9 (火)	読売
88 本学は2014年度入学者選抜要項を発表	7.11 (木)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成25年6月16日～7月15日]

記事	月日	新聞等名
89 強敵 薬効かめ「殺人菌」：荒川宜親医学系研究科教授はCRE（カルバペネム耐性腸内細菌科の菌）について「種類が多いので検出が難しく、見落としやすいと」語る	7.11（木）	朝日（朝刊）
90 石原一彰工学研究科教授などは光学活性化化合物を高活性で合成することを可能にするヨウ素系不斉触媒を開発	7.12（金）	化学工業日報
91 本学は4学期制について「検討しない」と回答	7.12（金）	読売
92 探訪先端技術：プラズマ 工学研究科附属プラズマナノ工学研究センターが取り上げられる	7.12（金）	日刊工業
93 学ぶ育む：大学の實力 学部別 卒業生の進路① 本学が取り上げられる	7.12（金）	読売
94 第27回ユニバーシアード競技大会：鈴木亜由子さん経済学部4年生 陸上女子5千メートル 3位	7.12（金）	中日（夕刊） 日経（夕刊）
95 鈴木亜由子さん経済学部4年生はユニバーシアード競技大会の陸上女子5千メートルのレースについて「スローペースだったので、前に出て流れを変えようと思った」と語る	7.13（土）	中日（夕刊）
96 東海地区海外留学フェア2013開催：シンポジオンホールにて行われる	7.13（土）	毎日（朝刊）
97 伊丹健一郎トランスフォーマティブ生命分子研究所教授は、うねる炭素ナノ分子「ワープド・ナノグラフェン」の合成に世界で初めて成功	7.15（月）	中日（朝刊） 他2社
98 福和伸夫減災連携研究センター教授が6月末に行われたにっぽんどまんなか安心安全防災フェア2013で行ったワークショップの様子が取り上げられる	7.15（月）	中日（朝刊）
99 倉田和己減災連携研究センター寄附研究部門助教が「若者が地震に備えることが重要」と語る	7.15（月）	中日（朝刊）
100 高畑亮吾さん教育学部附属高等学校3年生は野球部最後の試合が終わり「3年生が抜けてもついてきてくれた2年生と、弱いチームだとわかって入ってきてくれた1年生に感謝したい」と語る	7.15（月）	朝日（朝刊）
101 第95回全国高等学校野球選手権記念愛知大会 1回戦：教育学部附属高等学校が中部大学第一高等学校に0-11（5回コールド）で敗れる	7.15（月）	中日（朝刊） 読売
102 豊田章一郎本学全学同窓会長が株式会社資生堂特別顧問池田守男氏のお別れ会で献花を行った	7.15（月）	日刊工業

第9回名古屋大学ホームカミングデイ

地域と大学で考える「生命の科学」を10月19日(土)に開催

名古屋大学ホームカミングデイは、卒業生・修了生や元教職員が集い、また、在校生のご家族の方々、地域の皆様に、本学の教育・研究活動の一端に触れていただき、本学の理念等を理解していただく重要な行事として位置づけられ、毎年10月の第3土曜日に開催されています。

現在、本学は国や専門分野をまたいだ教育・研究活動に積極的に取り組んでおります。そこで、今年度のホームカミングデイのメインテーマを「生命の科学」としました。国や専門分野の枠を越えた交流が新しい科学・技術を生み、私たちの未来を変えていく力になることについて、化学・生物学を中心に考えていきます。

皆様に有意義で楽しい一日をお過ごしいただけるよう、全力を挙げて準備を進めていますので、ご家族、ご友人もお誘い合わせの上、是非、第9回ホームカミングデイにお越しくださいますようお願い申し上げます。

NAGOYA UNIVERSITY
Homecoming Day
地域と大学で考える「生命の科学」

分子から始まり、
手まのカタチ。

参加費は無料
ただし入場券が必要です

第9回 名古屋大学ホームカミングデイ
2013.10.19 (Sat) AM10:00~ 会場:名古屋大学 東山キャンパス

名古屋大学 総務部総務課
146-8601 名古屋市東区東山
Tel. 052-747-6558 Fax. 052-789-2019
E-mail: home-coming@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

イベント一覧

【豊田講堂】

「名古屋大学の集い」
(諏訪内晶子×兵庫芸術文化
センター管弦楽団コンサート 等)
本のリユース市
農産物の販売
生協の名大グッズ等の販売
「氷壁」をこえて—ナイロンザイル
事件と石岡繁雄の生涯—
プレ展示 等

【シンポジオン】

学術講演「世界を変えるバイオ分子」
(基調講演: 下村 脩特別教授)
伊藤圭介生誕210年記念展
—東山に眠る本草学の宝—
講演・展示会 等

【野依記念学術交流館】

「名大東山キャンパスの雑木林の生物
多様性を観察しよう!」
(東山キャンパス雑木林の散策
及び展示)
あかりんご隊科学実験
「サイエンスクラフトで遊ぼう☆」
(名古屋大学理系女子コミュニティ
による科学実験) 等

【博物館】

企画展「本物? 作り物? ロウ細工?」
教育標本ムラージュ」
ミクロの探検隊
多様性にふれる
ハンズオン・ギャラリー
野外観察園公開

【陸上競技場】

名古屋グランパス
スクールコーチによる
親子ふれあいサッカー教室

【ツアー企画】

名大ウォーキングツアー
名大ミュージアムキャンパスツアー
超高压電子顕微鏡施設見学ツアー
スーパーコンピュータ見学ツアー 等

お問い合わせ先

総務部総務課 TEL: 052-747-6558, 6559 FAX: 052-789-2019 E-mail: home-coming@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

詳細につきましては、ホームページ(「名大ホームカミングデイ」で検索)をご覧ください。

概要パンフレット「名古屋大学プロフィール2013」を刊行

本学では、このたび概要パンフレット「名古屋大学プロフィール2013」を刊行しました。

本誌は、本体編と資料編（各年1回発行）の2冊で構成されています。本体編は、「名古屋大学の強みを発信する」をコンセプトに制作しており、今年度は「名古屋大学の最先端

教育・研究」をテーマとし、「次の先端へ。」と題して、インタビュー形式でわかりやすく本学を紹介しています。資料編は、数字等のデータにより、本学の取り組みを客観的に紹介しています。

ご入り用の方は、広報プラザで入手できます。

また、高校生向けパンフレット「GUIDE TO NAGOYA UNIVERSITY 2014」（年1回発行）も刊行しました。

ご入り用の方は、入試課で入手できます。



イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
5月21日(火)～9月13日(金) 場 所：附属図書館 医学部分館2階入口ホール 時 間：9:00～20:00（平日） (8/8～9/13の平日は9:00～17:00)、 13:00～17:00（土曜日） 休 館 日：日・祝日、 8月15日、16日、26日～30日、 8月10日～9月7日の土曜日 入 場 料：無料 [問い合わせ先] 附属図書館医学部分館 052-744-2505	附属図書館医学部分館 第4回ミニ展示会 「珍品・逸品・新収品－医学部史料室の最近の収蔵品から－」 
7月27日(土)～8月24日(土) 場 所：豊田講堂、他 時 間：9:30～17:10 定 員：500名 参 加 費：3,000円～（企業防災コース除く、 オプション追加あり） [問い合わせ先] 減災連携研究センター 052-789-3468	平成25年度防災人材育成研修 「防災・減災カレッジ」 講 演 者：福和伸夫（減災連携研究センター教授）、 山岡耕春（環境学研究科附属地震火山・防災研究センター教授）、 栗田暢之氏（特定非営利活動法人レスキューストックヤード代表理事）、他 内 容：防災概論、自然災害概論などの防災基礎研修

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

8月5日(月)～23日(金)

場 所：法学部2階第3講義室、他
定 員：35名
対 象：アジア諸国および本学学生
参 加 費：無料

**Nagoya University School of Law
International Summer Seminar 2013**

[問い合わせ先]

法政国際教育協力研究センター
052-789-2325

8月6日(火)～10月19日(土)

場 所：博物館2階展示室、
野外観察園セミナーハウス
時 間：10:00～16:00
休 館 日：日・月曜日、8月15日～19日
(博物館)、
土・日・祝日、8月15日～18日
(セミナーハウス)
入 場 料：無料

**第27回博物館企画展
「本物？作り物？ロウ細工？ 教育標本ムラージュ」**

[関連講演会]

場 所：博物館3階講義室
時 間：14:00～15:30
対 象：一般
参 加 費：無料

9月21日(土)

講演題目：「よみがえったムラージュ 名古屋大学の宝」
講 演 者：小林身哉氏 (金城学院大学教授)

9月26日(木)

講演題目：「新しくわかってきた皮膚疾患発生のメカニズムー皮膚バリア障害など」
講 演 者：秋山真志 (医学系研究科教授)

9月28日(土)

講演題目：「三河発シイタケ栽培 明治初期の近代菌類学パイオニア：田中長嶺」
講 演 者：中條長昭氏 (特定非営利活動法人田中長嶺業績顕彰会理事長)

10月12日(土)

講演題目：「第四高等学校旧蔵『キノコ・ムラージュ標本』の再発見とその後の展開」
講 演 者：古畑 徹氏 (金沢大学教授)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



8月18日(日)

場 所：豊田講堂
時 間：11:00～14:30
定 員：600名
対 象：中学生、高校生 (一般も可)
参 加 費：無料

**第24回英国科学実験講座
クリスマス・レクチャー2013**

講演題目：「現代の錬金術師」
講 演 者：ピーター・ウォザーズ氏 (ケンブリッジ大学教授)
内 容：炎や水、空気に秘められた知られざる「化学」の世界を、
驚きの実験で解き明かす (日本語同時通訳有り)

[問い合わせ先]

研究協力部社会連携課 052-788-6144



8月20日(火)～10月15日(火)

(期間内の火・木曜日)

場 所：経済学部1階第1、第2講義室
時 間：18:00～19:30
定 員：200名
対 象：一般
参 加 費：9,200円 (全15回)

平成25年度名古屋大学公開講座

テ ー マ：「絆：つなぐ、つながるを考える」

[問い合わせ先]

研究協力部社会連携課 052-789-5969



イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

8月20日(火)

場 所：工学研究科 2号館、他
時 間：10:00～17:00
定 員：50名
対 象：東海地区の高校生
参 加 費：無料

テクノサイエンスセミナー2013

テ ー マ：「グローバルに活躍する航空宇宙工学」
内 容：テーマ別に講義、体験実験



[問い合わせ先]

工学研究科 教授 笠原次郎
052-789-4404

8月23日(金)

場 所：文学部 1 AB 講義室
時 間：14:00～17:00
定 員：40名
対 象：本学および近隣の大学関係者
参 加 費：無料

高等教育研究センター

FD・SD 教育改善支援拠点事業ワークショップ

講演題目：「事例で学ぶ教員免許業務」
講 演 者：村瀬隆彦氏（大分大学学生支援部長）、
小野勝士氏（龍谷大学文学部教務課職員）
内 容：教員免許業務の現場で実際にあった事例を紹介しながら
ポイントをワークショップ形式で学ぶ



[問い合わせ先]

高等教育研究センター 052-789-5696

8月24日(土)

場 所：博物館実験室、展示室、
東山キャンパス構内
時 間：10:00～13:30
定 員：20名
対 象：小学 5年生以上、一般
参 加 費：50円（保険料）

ミクロの探検隊®

「名古屋大学のムシを電子顕微鏡で観察しよう！」

テ ー マ：「雑木林のムシ」



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

8月26日(月)

場 所：ES 総合館 1階 ES ホール、
ES 会議室
時 間：10:00～16:00
対 象：参加校の高校生
参 加 費：無料

高校生防災セミナー

内 容：愛知県内の高校生を対象とした防災人材育成のためのセミナー

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

8月27日(火)

場 所：情報基盤センター 4階演習室
時 間：13:00～14:30
定 員：40名
対 象：一般
参 加 費：無料

平成25年度第 5 回情報連携統括本部

公開講演会・研究会

講演題目：「スーパーコンピュータの役割（仮題）」
講 演 者：石井克哉（情報基盤センター教授）

[問い合わせ先]

情報推進部情報推進課 052-789-4368

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

8月31日(土)、9月1日(日)

場 所：矢作川の河原(岡崎市)(8/31)、
博物館(9/1)

時 間：9:30~15:30(8/31)、
13:30~16:30(9/1)

定 員：20名

対 象：小学5年生から中学3年生と
その保護者
(中学生以上は個人参加可)

参加費：無料

名古屋市科学館共催事業

平成25年度第2回地球教室

ひらめき☆ときめきサイエンス

～ようこそ大学の研究室へ～ KAKENHI

テ ー マ：「河原で宝石と歴史を見つけよう！」

内 容：河原に出かけ、土器・陶器やガーネットなどの鉱物を見つけ
ながら、自然と歴史について学ぶ



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

8月31日(土)、9月1日(日)

場 所：理学部C館2階物理会議室
(C207号室)

時 間：10:00~16:00

定 員：各20名

対 象：中学生以上、一般(8/31)、
高校生以上、一般(9/1)

参加費：500円(材料費)

2013年度第2回先進科学塾@名大

テ ー マ：「音をみる！」

講 師：林 熙崇氏(愛知物理サークル)

内 容：参加者に目で見える音の実験をしてもらい、音の世界の不思議を探る

[問い合わせ先]

エコトピア科学研究所

教授 中村光廣 052-789-3532

8月31日(土)、9月7日(土)

場 所：ジュンク堂書店ロフト名古屋店
7階ブックサロン
(名古屋市中区)(8/31)、
小牧商工会議所
(小牧市小牧)(9/7)

時 間：14:00~16:30

定 員：30名

対 象：中学生以上、一般

参加費：無料

あいちサイエンスコミュニケーション・セミナー2013

講演題目：「英国のサイエンスコミュニケーション

ー科学の信頼をどう取り戻したかー」(8/31)

講 演 者：小出重幸氏(日本科学技術ジャーナリスト会議理事)

講演題目：「あいちサイエンスフェスティバルの仲間になろう！

ーサイエンスイベントを企画しようー」(8/31)

講 演 者：藤吉隆雄(産学官連携推進室特任助教)

講演題目：「生態系ネットワークをつくる！ー人と自然が共生するあいちー」、

「あいちサイエンスフェスティバルの仲間になろう！

ー森と緑のサイエンスイベントを企画しようー」(9/7)

講 演 者：藤吉隆雄(産学官連携推進室特任助教)、他

[問い合わせ先]

あいちサイエンス・コミュニケーション・
ネットワーク実行委員会

担当機関：産学官連携推進室

特任助教 藤吉隆雄 052-747-6527

9月11日(水)

場 所：博物館2階展示室

時 間：14:00~15:00

参加費：無料

博物館コンサート NUMCo

テ ー マ：「ヴィオラとハープによる初秋のコンサート

ーイギリス・フランスの名曲を中心にー

演奏曲目：「夢のあとに」ガブリエル・フォーレ、

「ヴィオラとハープのための『幻想的ソナタ』より」

アーノルド・バックス、

「子守唄」フランク・プリッジ、他

出 演：小松 大氏(ヴィオラ)、

荒木まどか氏(ハープ)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

9月20日(金)

場 所：環境総合館 1階レクチャーホール
時 間：18:00～19:30
定 員：120名
対 象：一般
参 加 費：無料

第93回防災アカデミー

講演題目：「風評被害のメカニズムとその対策」
講 演 者：関谷直也氏（東洋大学准教授）
内 容：社会心理学関連



[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468

9月22日(日)

場 所：愛知芸術文化センター12階
アートスペース A
(名古屋市中区)
時 間：14:00～19:00
定 員：180名
対 象：一般
参 加 費：無料

グローバル COE プログラム

「地球学から基礎・臨床環境学への展開」 公開シンポジウム

テ ー マ：「環境・文化芸術まちづくりへの処方箋
—低炭素・アート・豊かな暮らし—」
講演題目：「都市化の診断と治療—経済の時代から環境・文化芸術へ—」
講 演 者：林 良嗣（環境学研究科教授）



[問い合わせ先]

環境学研究科
助教 吉田友紀子 052-789-3431

【訂正とお詫び】

名大トピックス242号（2013年7月発行）で以下の誤りがありましたので、深くお詫び申し上げますとともに、下記のとおり訂正させていただきます。

242号8ページ・上・受賞者名 上から3人目【理工系】大学院理学研究科
【誤】三宅 美紗 【正】三宅 美沙

名大トピックス No.243 平成25年8月19日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ

(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

第67回名古屋大学・大阪大学
対抗競技大会（ハンドボール
部）の試合の様子
（平成25年6月22日）



136 学部の誕生と草創期⑧ — 文学部 —

1939(昭和14)年に理系学部のみで発足した名古屋帝国大学にとって、文学部など文系学部の設置は大きな課題の1つでした。当時の新聞によれば、早くも1941年には評議会で文学部の設置申請が話題になっていたようです。しかし戦時体制下において、文系学部の新設はきわめて困難でした。

戦争が終わってのち、1946年2月には、GHQのいわゆる神道指令により廃止が決まった官立神宮皇學館大学(三重県に所在、1962年に私立皇學館大学として再興)を名帝大が吸収し、これを法文学部の基礎とする構想が持ち上がりましたが、結局これも実現しませんでした。

1947年10月、学内に新学部創設委員会が設置され、文・法・経済の3学部の創設をめざすことになりました。その際、新制大学になる前に学部を新設の方が比較的容易であるということで、旧制の学部としての設置が選択され、実際に新制大学発足半年前の1948年9月、法経学部とともに

に文学部の創設が実現したのです。

当初の文学部は、新1年生43名、教員14名という少人数でのスタートとなりました。学科は3つあったものの、西洋哲学史、印度哲学史、日本近世史・書誌学、西洋古代中世史、国語・国文学、英文学・文学概論の6講座しかありませんでした。これらの講座が重視されたというよりも、教員が確保できた講座から設置されたというのが実際だったようです。

学部創設3年目には、15講座まで増設され、1学年定員120名、教員も助手を入れて42名まで増えましたが、環境面の貧弱さは否めませんでした。校舎としては、財政的な事情で東山に新校舎を建てることはできず、法学部や教育学部と同様に、名古屋城の老朽化した旧陸軍兵舎を利用しました。前身にあたる学校がないこともあり、蔵書の不足も深刻でした。それでも、教員、職員、学生が一体感を持って、苦しい草創期を乗り切ったのです。



- 1 1953年の名古屋城(名古屋タイムズアーカイブ委員会提供)。楕円で囲った3つの建物が、上から文学部3号館、2号館、1号館。
- 2 名城の文学部1号館(左)、2号館(中央)、3号館(右)。3号館の建物は、犬山市の野外博物館明治村に移築して展示されている。
- 3 名城の校舎の近くに数多く植えられていた青桐(『写真集名古屋大学文学部の五十年』より)。これが初期の文学部同窓会である「青桐会」および現在の文学部・文学研究科同窓会のニュースレター『おおぎり』の由来になっている。

1	2	3
5	4	

- 4 国文学研究室の演習風景(1962年)。法学部や教育学部と同じように、古い木造建築のため石炭ストーブや火鉢ではなかなか温まらず辛かったという話が残っている。
- 5 1950年代初期の女子学生(『写真集名古屋大学文学部の五十年』より)。当時の名大には、文系理系を問わず女子学生の数はきわめて少なく、1957年の段階でも、大学院生・研究生・聴講生を除く学生のうち、女子の割合はわずか5.5%であった。ただその中で文学部はやや例外で、約2割が女子学生であった。